

雑誌偏愛

石川巧

原爆文学研究会の発起人だった花田俊典さんの急逝から、はや七年半が過ぎた。その原爆文学研究会が次々と新しいメンバーを加えながら活動を続け、多様な研究成果をあげていることを嬉しく思うとともに、あらためて、このような研究会を立ち上げようとした花田さんの慧眼に驚きを感じる。せつかくの機会なので、同僚として働き、至近距離でその仕事ぶりに接していた私が記憶する研究会発足当時のエピソードを、少しだけ書きとめさせていただく。

二〇〇一年当時の花田さんは、主著のひとつである『太宰治のレクチュール』（双文社出版）、『清新な光景の軌跡―西日本戦後文学史』（西日本新聞社）の草稿がほぼ揃い、もう一度、思考のあり方そのものを立て直そうとしていた。五〇歳になった自分に残された時間を逆算し、二一世紀をどのように駆けぬけてやろうかと腕まくりしていた。恩師・重松泰雄氏が没し、同僚の海老井英次氏が定年退官したあとを受けて、若い研究者や大学院生を牽引する立場になった自分を省みながら、知的オルガナイザーとして生きる矜持を固めていた。

そのなかでも特に花田さんが精力を注いだのが、自前の言葉を発信する（場）を構築することだった。第二期に移行した同人批

評雑誌「敍説」は、より先鋭的なテーマを掲げるようになっていた。北川透、山本哲也、渡辺玄英らと編集していた同人雑誌「九」が終刊した直後、広島大学教育学部の面々とともに「Problematique」（二〇〇〇年七月創刊）に参加し、のちに『沖繩はゴジラか―反・オリエンタリズム／南島／ヤポネシア―』（花書院）に結実することになる「自画像と他画像の問題―沖繩現代文学とオリエンタリズム」の連載を始めていた。福岡市文学館の設立に奔走し、企画展図録『カフエと文学―レイロで会いましょう―』、『余は発見せり―伊達得夫と旧制福高の文学山脈―』、『本』を創る『フクオカ出版物』などを制作していた。

ちなみに、この頃の花田さんは、高等学校の国語教科書（桐原書店）、「日本近代文学」（日本近代文学会）の編集委員をこなし、「西日本新聞」では連載コラム「雪月花」を担当している。九州・山口・沖縄の出版文化をオンラインでデータベース化することをもくろみ、「スカラベの会」を立ち上げて「スカラベ文学事典」、「福岡都市圏近代文学文化史年表」を作成している。津屋崎町総合計画審議会委員、まちづくり委員会委員長として地域活性化に取り組むかたわら、「国文学解釈と教材の研究」の「学会時評」を引き受け、坂口安吾研究会まで発足させている。もちろん、そうした活動のかたわらで依頼原稿をこなし、単独の研究論文を執筆し続けていたことはいまでもない。――花田さんが原爆文学研究会を立ちあげ、「原爆文学研究」を刊行すると言いはじめたのは、そのようにして多忙を極めていた時期である。花田さんは忙しければ忙しいほど別の忙しさを探してしまう人なのである。

すでに、一九九六年から五年間にわたって継続していた（批評

理論の会（最終的には三七回開催）で、「拒絶された原爆展」（みずす書房）、『核時代に生きる私たち』（時事通信社）、『アウシュヴィッツと表象の限界』（未来社）といったテキストを扱うようになり、「敍説」（一九九八年八月）で特集「原爆の表象」に挑んでいた花田さんは、北九州大学秋期公開講座（二〇〇〇年一月）での講演「原爆の再問題化のために―アウシュヴィッツ、シベリヤ、そしてヒロシマ／ナガサキ―」を経て研究会発足への地固めをしていた。また、「Problematique II」に掲載された川口隆行さんの「原爆文学」という問題領域——「夏の花」「黒い雨」の正典化、あるいは『原爆文学史』——を読んで、その論旨に深く共鳴し、川口さんをパートナーとして研究会を動かしていくことができるかと確信するとともに、具体的な準備を進めていた。

二〇〇二年四月。私が九州大学比較社会文化研究院に赴任したとき、花田研究室には、すべての準備は整ったという気概と高揚感が溢れていた。大学から何の援助も受けることなく、勝手に九州大学日本語学会なる学会を立ち上げ、出版にかかわるすべての費用を自前で賄う画期的な学会誌、「九大日文」を発行することも決まり、教員と大学院生がこぞって論文を量産しようという雰囲気ができつつあった。学内ディポジトリという概念すらなかった時代に、「雑誌そのものをPDFで作成してオンラインで読めるようにすれば、自前の言葉で世界中と対話できる」と意気込んでいた。

だが、五月に第二子が生まれたばかりということで、しばらく大学業務以外の仕事を免除してもらっていた私のなかには、いく

ばくかの焦燥と疎外感が混じっていたように思う。すでに、第一回の原爆文学研究会が開催され（二〇〇一年二月三日・九州大学六本松キャンパス）、「原爆文学研究」に掲載される論文、エッセイなども集りつつあったが、私自身は、いまだその活動にも参加できないまま家事手伝いや幼児の相手に忙殺されおり、自分が蚊帳の外にいるという感覚を拭い去れないのであった。

そんな七月下旬のある日、研究室で雑談をしていると、急に花田さんが「雑誌の装幀を考えてなかった……」といはじめた。原爆忌がやってくる八月までには第一号を刊行しようということで原稿を集めていたにもかかわらず、肝心の装幀が決まっていなかったのである。焦った花田さんは、PCの画像編集に詳しくかった大学院生（当時）の中野和典さんをつかまえて徹夜の作業を開始した。

もちろん、斬新なデザインが空から降ってくるはずもなく、私たちはそれぞれの研究室にある印刷物を掻き集めてイメージの原型を探した。夜を徹してああでもないこうでもないと思いを交わしながら朝を迎えた。だが、そんな夕夕バタのなか、私は密かに、自分が差しだした図録が役に立ったことを喜んでいて。困り果てている花田さんに、ほんの僅かでも貢献できたと思えたことで、自分もやっと原爆文学研究会の仲間になれたような気がした。

私が九州大学に赴任することが決まったとき、花田さんは「一緒に面白いことを企もう。夢を共有しよう」といつてくれた。あのとき語ってくれた夢のひとつが、「原爆文学研究」だったのだらうと、いま思う。